菟玖波問答

傳書

全

伊地知文庫
文庫20
131

文庫20
131

菟玖波問答　全

筑波山連歌志

石井俗融

伶聞素戔嗚尊到出雲國始三十一字々詠之後
自九夜十日之言葉已往以風大興衰樂相変
雖異質愚之性和歌感生任志詠之以
暮風迷塵而已　爰閑白二條大閤覧和歌
美景舊池吟詠取當權現化翁入尋彼玉
殿春営啼花中秋螺吟樹上林杉等物
語等給其詞云云

伊地知氏書冊

過ぬ　一長月頃うまとはと舊地の記等に
拂て燒樂を思ひたるるのうき彼孔燒
をまるのはされとも杉ようふ(ま)てハあ(ま)り〳〵さて
〳〵震かくれの水は西ハ常に兩部の鼓
吹とも聞るに清風ふりはらる松の姿
苔ふるき巖のさまも見不るき物からわさ
とめ紀〳〵彩このたの山水ようハ代々は昔
かたり同まほ一きあのんを〳〵せそことるき
みまかくれる姫りたてぬるもいとるきけるき
ん地そを彩長面志めやうようち續され
百るき次ハ色の哀も数そひ袖のみりさも

京都帝國大學圖書

海さるん地にてゐりめいくたるゐ松の戸
ぬらちたくく人あり誰ゐふんとゆうしそれ
ハいつくの人そと見侍るよかさぬ中ふり
のぼりる翁の山水ゆうくてわさと
ちり侍りあけて考く一目見せ給へといへハ
を一て見ゐるく侍く海一名れと何うも
ちくかりやさんとて明ていれ申翁年ハ
八九十ふも成ぬふんと見へて謀ゐ元るれ
也海ふあと海えこるさ海るもてと元と一ゐ
綾のおゐ立ふりて長いさ記よき所の流
う船ふハこち水ふうしふるとふるれある

くゐそ海ことけさちう水ゐて侍ふん昔仲尼
といひ一聖人乃水ゐるゐ瓦とは免らまた
るも常ふことハりるへし屋根ををてを
流れゆくさるふうう川のるにつけて進む
ころさ一ハあも)ともちそくるれるけ
も)ハそのるみる成をるやさも)ハ丘陵多く
山をまる(ともを一てし山みをふるるし
百川ハをくむるのをこ考ふやされバ屋うて
海とも成侍也なといあふを皮ふいとんふく
耳ゐこち侍り云ハわらへをあ一ていつく
ふりいうる人ゐてかくく立ふり給つるそと同ハ

山翁のいはく所川まれたく常陸の西の国住侍る
や若より山あるを心をたてはしてよろ川の石へ
あるさまして八九十年をもなぬらん山出他をも
なひくく人侍りしるふさひるにさるかたりて
いと西白き侍る物の時ふ志ろうひて風れう
侍りふり侍る所さるもかくこそと思ひ合
さるし東海の三さひ来京とあり常をを
人侍りる仙人もかくこそと我らうるを
ひの程も今更あと訪うをぬるとかるまハ
んも志ぬ田舎人をかるらひふんもちい
かりあるゆまとことの系れあるりやさ

しく心ふるく蒙りしハ山わらへていやく
東のたくよりたるくに思ひくれるる心さ
しれいとありかるく侍てたるを何う
あやるくるとやふる事も侍れハ生い山
かるらんのをとへよりぬ身うむうー語も
やさんといへハかるる侍るうけ語ハ志の事ま
侍れとも東路のあとろくもあまりおそま
あるさるるりまきやくく被語ある〜るを
いふをたゑくー爰もとえといへさうせつえみ
さりてらんの許ま家で頭へをくれて思
るさるもふくくくそみえー

うハのそゝにやゝ〻ゝ伝るもさゑかゝゝ考る
検るれとも面ちれるハ伝らをたゝ昔話の
きゝ侍ハ〻〻伝るやふるき日記るとハあ母
つゝるゝゝぬとまさ〻〻くその時れ人ゝ系〻て
ありのまゝふ業度伝るゝ人の命ハ百と世
三万六千よ余日とかやゝくゝけ殺りをきたま
ゝを以ハ又そち六そちふあ伝ふ人ゝよ
ままてるゝゆ者ハたうるきむゝ語や
つきあたふさゝくゝる〻伝る之翁の姿をみる
にいまハさゝ〻免て九十ふも母ゝ殺ぬゝん
きゝをきゝ人をきゝ殺〻るを母ゝれまゝゑ

語り殺〻といへハそのゝよ伝り翁ゝ年よあよ
ふ人も今ハ系國のゝちふハよも伝ゝ後白
羽院の末つゝさのゝふゝ以ゝれるハいゝく
忘伝らぬやさゝるゝゝいつくをもめと中
おへきふもあゝ次〻〻そのゝと御殺ゑ付てハ
ゝゝゝもやさんといふふいゝふ〻きハあ
ぼくて京へハ叔何度斗のぼり殺へぬゝん
といへハ又六十度ゑも成ぬゝん この御所の
ありさゑも後白羽院の内時ゝゝゝ人伝り
しや以水無〻昔ゝり名池ふて伝りしゝとも
以更業元二年の比ゝよ後白羽院三条

防門との迎ときつゝせ弦て詩歌管絃乃
れ遊ぶまて侍りき後の資孫のれ時ハ式泉殿まて
御連歌年毎小庚申日ハ必侍りしや雑内侍
少将内侍ゐるといふ女房連歌しゝ宮廉の内より紀
のむつ女衣のつ女くちを出てうゐりみちて
んも及ぬ句ともゆ出さまを侍しハ人く感ま
さ〳〵寄言ゐ寄りま吟詠せてふれき又御服不の尼
とて七八十まゐる連歌しを侍りきそれハ京
極中納言入道廣ゐと同一時れ人まて侍り
ほらんこのれハ女のき歌しゐるとの侍ぬ毛怠
のゐやゐると神ちちぬ歌しかゝまを何事ふり

も耳ま世川ゐるれバさていつくれ世まて
あひ立弦ひる人そ歌連歌れ乃ハゐらひ
弦さるかと問〳〵ハ元〳〵ちれ侍くはのあゝう
のそのゐりむう〳〵日ゆ世きそるれまゆ井むりれ
縣をゐて甲斐国酒折の宮まて連歌し弦
ひ〳〵記もいま〳〵侍ゐるとかゝ当ふいふ〳〵家
〳〵歌てさてハ家連歌もこのこ弦ひ侍ん
式道のゐむう〳〵笠をき弦つゝんふ〳〵
を殘さを侍りぬ〳〵といへハを〳〵て悲去の才ま
て侍れハ家とそもちてち去侍りしとをゐかり
〳〵かともゐくれ物乃上ゐまみゐる見侍きハめ

侍り紀連家はまくらいとまるかりし時より
京極中納言屋敷に入道屋敷とふもとと
はれ忍んありて時々来りかよひしうハを詠
たゆ川絲あきらめやきち地下はれ人くハ亦昭近
代くよ数ちくを侍しるすも皆翁が命のうちはれ
るるれハをの川うくはふ審も侍らハ殆をきし
るもさるゝ向答しに侍よ永基日を
若かくるるり入相のもうもちちきりし
うハ忘れしとて始るれ懐帝のうらにかき付
侍るるり心さしはれあくん人ハ出流してさ
そと思ハまんるふハ題を侍はせ殆へしとるり

向云連家ハこの芦原の國斗り歌をのふて侍
う又人の國ふも侍りや翁答て曰いとる彩
しき御君ふも侍るうる連家ハ天竺ふて侍倡
と中之詩の經ふ倡をときたるハ別連家せ
唐國ふてハ聯句と中るり流ふてハ家を
侍かゆたまハ連家と中ふや昔の人ハつけ
家とそ中侍りし
代より始りるるや侍れるもさるも細うふ
侍りしに答曰古今假名序ふ貫之の
加ける天のうきたしれこんをとと云ハ別
連家るり

老子神の発句

あなうれしゑやうましおとめにあひぬ
とあるに女神の佐けてのたまはく
あなうれしゑやうましおとこにあひぬ
と付給ふ此哥を二へしてふたを連哥とハ
申く二柱の神の発句にあらすや此句三十
一字にも何かきみしかく侍りハ題なき連
哥と翁んへて侍るゝ古への此道うちにも
是申侍りしかハ誠にいはれありとそ語ら
れし又連哥とていひ通ふるハさゝきに申
つるふしに日本紀に景行天皇の御代日本
武尊あつまの夷をきたつ兇に向給ひて

此翁ここの法をこゝ侍し佐くはをとるて甲斐の
國酒折宮にとゝ滞り給ひし時日本武尊御佐句に
珥比磨利菟玖波珥須擬底異玖用加
祢菟流　をへて付申人なかりしに火を
ともしいとけるきこらハの付て云々
伽餓奈倍底用珥波虚々能用比珥波
苦塢伽塢　と申されたるハ尊ほめ給
へるとなんその後万葉集に入たる家持卿の
さほ川のみせき入てうへし田をといふに
尼かかるわさ稲ハひとりなるへしと付侍る
かゝしみるすとも次第にたのふなり拾遺金

葉なるとゝりハ勅撰ふ入侍りせされとたゝ一句
つゝ云さてゝる斗ふてゝ五十句百句なるとも及
るハるかりきさうなる句なるよ後鳥羽院建保の比
よりさうくゝうかいろ〳〵物〳〵物の云とり連
歌を宮家家隆卿なるとゝめされ侍りしより
百韻なるとふも侍るふやや又さゝ〳〵の懸物いさ
されてあるゝ〳〵御舎とも侍りきふよきさ
連歌ハ柿のかけ衣と名付らるゝ已後きを
ハ栗のかけ衣とて別座よつきてそさ
侍りし有やゝとてゝるハさき連歌と和句
とをませゝよせらもてゝるゝ常ふ侍り

土御門院又順徳院なるとの御制表ハとも
比叡なきそ侍りしそ後後嵯峨
院ハ御代ふ殿外（ホカ）真ハ侍りありて民部ハ入侍る
と為氏大納言殿なると古へ〳〵も書ちこ〳〵る
よ〳〵侍りし大方京極中納言入道殿
も老坂よハ日毎よ連歌をせられ侍りあり
れ腹とりハ尼とうやい〳〵ふ物上ふふて老よ弘
ハ侍るよ彼日記ハ物ふ物ふ侍るよ
誰もさゝめて此流〳〵侍るん又後嵯峨の
此時福光園院白殿園院寺殿改殿庚申の御
連歌ふも書びゝさふ〳〵ハせ給へき何書も名

誉の上なふて侍りしとうや女房ハ弁内
侍ハ将内侍うゝちさをあぐそ（うる堪能ふて
そ所りしれ条大内基家衣笠内府家良知
家行家ねるとき時きこ（うる人ふて侍るや
らん地下ふも花のおれ好士たはるゝ　かと
もう（さ海乃の人くれ上なふてありしハ
元ふてぬけおうるも侍るを乃生寿思
を生るとゝいひ一を乃号思沙門堂法橋
寺れ花のおふてふ川の色の多くなりつ
発て表毎ふ連京し一侍りし支ふ後そ
いろ〳〵ふ名をはるゝる地下の好士もあはく

るゝ侍り一近くハ為世爲相爲兼ねるゝと
思ひ〳〵の式目を侍くらきるとして賞翫
せられ一るハ京下ふちかきるゝれハさゝ
めて沛説一もあふせ給ぬん又警れ尾
の花れおふても院の出車ると立られるる
ふも侍りき又後光明院殿ハ年毎ふ出車
たて遊まして出ふ勾るとも乃一ふや関東ふ
も代くれ管領とふ好まれ一るれも
中ふ及侍ふを近くハ筆持院殿とふ出数
奇ふて勅撰の執奏も侍り一ふや若阿とい
ひ一をのるらびるき上なふて門弟とも今

ふけ乃の堪能なて付るふこそ但連歌のや
うハ所説を変くれともさて〳〵て時よりさくひ
て風の移りうるれハあくぬそのふるりれ付る
るり救渉も若何う沖子と帰りつれともそ
の姿ハさくとあくれぬ物なてそ付るあ井よ
り出て藍より何をく氷りハ水よりあて水
より寒くといふすれあれハ未の世もいう
よか放行付るんかそる屈きハ後世るりを
ヤる付るふやあよそ連歌ハこの比のたう
さハ本ふてある（きるり勅撰をえくられて
多くれ姿を残しあかまたれハ後の人ハ

今を作く屈きよやた（のまこ歌ハ秀句對
句をくあ句いひつけくる斗之中比ハ
又一句れ放せさる句を歌のやくふ云つけ
たるく近比よりそんふ作く云もゆけん
るるるとも風れとも比比のやくふんをま
ハ一絹をこかきて尚産の真を俳を板
るるる翁いまくを付くさりき適ふふり
懐帝るとと及付るよそ老の命もるを
のゑぬ（きんん地一付るあ屈かくを歌の道ハ
んるき民の耳よ近くてこそ歌の風をもう
つ付る（ゑも）毛詩とふ多みこえのあやを

るさとといふも洞の花はけるふやおるゝき外は
後嵯峨さるふゝ（されハ詠歌さとい（るもゝ
雪所の西白を中ゝるふ やゝ歌の乃ハ祕るは
ゝるも乃ん連歌ハ（ゝ古（のもゝ宮れ
るするけまハ毎ゝ尚歌の感をもよ月をむ
そ眞ハある（き上毎といひてゝらハゝこ
ハもゝ雪ふゝかゝるすゆめゝ用ゝふ屋かゝ
さ五条三位入道歌のるすを中されゝるふ
もたゝ詠歌とてゝちゝ詠まハ形とやらむ西
家そひゝるをこそはめらまゝ月やあ
らぬ其やむゝるといる歌ハとハりをきゝ

さるゝりゝちゝるゝむれハ先所ふ入心地そさる
其の花のあゝりゝ長のたるゝき植根の梅
ゝ雪れるきゝるとゝ家いき風情のそひ
ゝるをそ家ゝもはめらられたる連歌の乃も
又かゝこそ侍らめかま（て（ゝ数寄れ人ゝも
先幽玄れ境ゝ入て後色も角も去ゝふ（きゝ
晩唐の詩といふ物をゝ（ゝ（て心もゝゝぬ
さきゝゝ竹の西白てゝんゝもゝむやゝふゝ月（
侍る也詩家の乃ハゝゝ心ゝゝゝゝて洞の
花を咲せ玉の中ゝ玉をみゝく（き物ゝりと
そゝれ弱ゝりをきゝ侍るなゝ　同云連歌ハ

國のまつりごとのたちけるとにも侍るべき
ものとや人のあるハあまりのるふや　答曰
遥きゝもてと新しきれ見うるあ用うゝ事
といつるハ政のゐるきさを侍さゝくハやるす乃
あそれあるハ物よよせて事を仰りておと
多よ志侍る國王法候も見を御覧て玉政
をるをさゝして唐の事ハ侍とゝふ多も皆
この事ともそふりさてこそ中人多ゝ罪るくて
政ハるを爲るふて侍ま氣玉ゝも日本紀乃
事ハこる童謡とてあとゝ多まて侍るり第
葉よりそゝ月爲よゝいゝたる事ハお

わく詠ゝ侍るされハ古今の序ゐも実
こる爲てその花ひとゝ侍うふといふハ見る
り又まめるる家ゐハ爲てなそむす文この
こ乃中よりとるれるもみる事れやゝゝ
さたれ行さる爲をいつる今の事ハ多ゝ花を
もて遊ひ月を思ゝるむうりまて風雅の
をうゝこのる況よや連事ハ世理ふさうひ侍る
侍ゝき物ゝいかゝ西白ふても何ま聊も
乃理にそむきたるハいゝつら物るり一字
のゐふはをも云うる絃いるす正理まあてゝ
業をるを連事の上ゝまと中ゝ自う心のこ
さる多まて侍るれ匂ゝまもいてきぬまハ

をはりは蓮如ハ七八句もみるそんしゝ侍るを
されハ佛法も世法も理といふ二の文字まて
侍るゝ　　蓮如和尚もくれ〳〵書をき給ふ
るり心さしく詞をるをるんをるハはをみ
あさまれる世乃ありまも叶ひ風雅の連歌まて
侍るへきも　　問云連歌ハ何を詠ハ
山せるゝを菩提の因縁ふ尝るり侍る歟
なとや中ハあまりけるるよや答曰あ用かゝる去
現在の法佛も歌をとる〳〵弱ゝをといふるる
所らゆる神佛古〳〵の聖ゝをちも歌まてあ不
彩〳〵我みち歌き給ひハ今更中ま及を連歌ハ
をま心あゝん人思ひ入て志給ふ歟きまやさま

ハ近〳〵ゑ〳〵佛圓禪師夏窓国師るを屋抜
もてあそをさま〳〵る定めて屋〳〵あるん
定て人ハも侍るらし　　信光を案をるま連歌
ハ前会場会を侍るを又感裏憂を侍さう〳〵を
るゝ〳〵て稀りもて行さる浮世のありさるをま
ことるゝを昨日と思ひハ今日まるを裏と思ひハ
秋まるり花と思ひハ和歌まるり川ろふさるを
松ハ花花歌葉の歌念もるるらむや歌の道
ハむゝ〳〵人のあまりま執んし侍りし程
ふ或ハ一首ま命をかゝ〳〵雅をあひてハ思ひ死ま
ゆ例もを歌りき連歌ハさま〳〵れこと侍ぬ
るゝ〳〵ゝ尚産の道奥を得をまてるれハ

さのミ執著抱心るきするべき一座も更ま
俗会るけれハ面会もおのつから感ま伝るべき
るもるーあるりま入不うるや強て伝ると
翁ゝ心の中ま見ふすをありけまゝま中無さ
とめて吹毛け雖もあ用く伝ふん
問云初人の時ハいかゝま稟性古ーても)云ハこ
のこ伝面面ふやを答曰情さ面くるる物と
いふ(るとも中伝りハ孟子と云ふハ生
つき性ハよき物るも)ともこ弱きるまるれぬ
も)ハ見弱くるるともいひ荀子と云ふまを
生ま性ハわろき物るれとも学の問るとー
てよく形るともいひ陽まと云ふまを人の性ハ

ゆまり善悪中ーこるる物るれハよき方まそ
うるも)ハよくるりて(ーき方まそう面も)ハ悪く
るるとやせゝ式ニの義こるそいまれあるまや
連欲も生れつきまるまり天性をえる上ま
もあるー又生得のいとつらそのもあり先
そ古人の上智とて下愚とハつら次とていう
ふたも)ともまの紀ハまるきまくまてとをり何ー
きハあーきまてたつるるり又善悪のまこと
る性ハ強者古まるるる面きまやるハくー云
上のもものく上ーまるるハ仕世一るふぬるも八雲
御抄まも示の道もも大聖文殊れ智恵まりお
こりたるとをとう世陪ひ
ひるるまや示まも定家
るとを漬れるる示ハ十
十六七乃比詠せくも)る

みも名歌ともよあはきく天の原あもへハうもる
色もるゝ〜るゝらゝまもゝるハ宮初の京と
こそうけ殆り侍れ連京も黒量の人ハ初学
より西白秀逸〜侍る色きるゝさされとも
るハ〜さ祇自古入てこそ白雅ハそろひ侍
る（書き）初心の人あはくハ連京のつもり侍
るやかま（京初学よハうきゝ〜と白むやふちと
とこともなきやゝ〜よるるを蔭〜ふて
上ゝよ侍〜至て次第よ何をもみうき風情
をもめくら〜侍る（きるゝ最初より上ゝ
めき西白かふんと案〜て白れ侍まりゝちち
ぬれハ次第よ何もうせ心もうせてを〜てあうる
るれるきゝあはく昔ゝ上はといふ人の初

心の時を見〜ハ徇の中よ色うあるゝ記
てゝふ〜と白むやよ侍りうるとのゝ歌り
歌侍りしるうさを）バとてを侍まて祇自古
るゝらんよハ只ふ〜ぬのあるハら木まて社やむ
（きうつゝくけつりみうきてそうるハ〜き
良枝よも侍る（京）昔雅波の三位入道厚人
よ鞠を蔡侍ひ〜を同を〜りしよゝもちハい
う祇も孔〜きたるうゝ紀と蔡られきを次の
日又あふぬ人よあひて鞠のゝもちゝ〜いはは
どもをハうたるうよ紀と作られきとかゝを
人の氣よ對〜て蔡られ侍るよや波日よ
昌中侍り〜ハそうるふ侍りさきの人も

まうさせハ〻〳〵行ふ孔子ハ
とあ〻〳〵後の人ハまうゐ
たるうなゐてあるとヤ世せ〻〳〵佛の元生の
氣を對〻て茅の法を説ぬるもかくれこと〻
連京もうこともるゞん人ふハ業せぬるきとお
〻〳〵きく但二日とれハまよ〻〳〵てとこともあき中
ふもよ上の堪能ハ自ら出く〻〳〵きとたてたく
人人ゑ〻うるハ〻〳〵きよ上〻まやはるはま〻〳〵きまや
只上まふ初よりそひて心詞を学ひぬふ〻〳〵
下まそひてろうき孔ゑ〻〳〵ぬきハさて〻てあを
イかく〻きく初心の行ゆめ〻〳〵万業以下のふるき
詞を好こぬふ〻うらまゑ〻〳〵あさ〻〳〵したる

白の安〻〳〵とゑるを詞なさ〻〳〵白かるふた
孤〻ふ〻〳〵きせるとうる西白うらんと業〻〳〵孤〻ふ
ことゆめ〻〳〵ゑ〻うらまいうる沈思石孤〻ふとも
ふきハあ〻ます〻〳〵きく又うろ〻〳〵としぬふとも
はのこゑ沈きるのこふて八行るます〻〳〵そ板ハ
師近のそうゑひヤ〻〳〵きるるれ氣をふとと
只ひてハを〻てあやまり其多かる〻〳〵きるるや人
のるらひこる氣ことう見し思と思ひ人の事ハ非と
只ふく連京もいうゑゑ〻〳〵う顔ふ思ゑん人ゑ世の
思るさ〻まハ屋ふれ京るとヤ物ゑるりて行る
るく加ま〻て〻〳〵ふき先達ゑあひてふる〻〳〵
伝習ゑ〻〳〵きるゑて行るそ〻と石の名近〻ちヤさ

れしう　　問云連歌ハ何も同一板ふ上なハ
去侍るや又他と風情もかるるるるるるき
るや答曰大方秀逸のほとハ定まるるるれ
ハいつもうるハ〳〵き姿をこそ〳〵れとも時の
好士ふよりて地とかふるるるるるき也千句
ハ始ハ一三百韻ることハおもむアて去侍
るるるきるや當座の百韻ハいう程もうき〳〵
とさ〳〵ぬきて西白きふ〳〵にさへ〳〵千句松
ふるりぬるハ発句ふりけるるき次もるき
連歌の謀〳〵きさとさと〳〵と去侍るるるる
の連歌も一の懐帋ハ西の程ハ去と座るる連

歌をさ〳〵〳〵ふはもうきたるや〳〵ふるる
るをハせぬるる二の懐紙ふりさ免きたる
句をて三の西の懐帋をハ計ふ逸興ふ
ふふ〳〵侍るるる示ふも席破急のあるるや
連歌ふも一の懐帋ハ席二の懐帋ハ破三の懐
帋ハ急ふてある〳〵鞠ふもかふ〳〵ふ侍るとそ
去ふの先達ハ中され〳〵連歌面ふ称〳〵き
詞亦先ふるき吳名うふ)たるる板るるふハ
せめ〳〵去移ふ〳〵うさこまき先達の口侍なり
問云上ふれ連歌ハ句ふとふ西白く侍る〳〵き座
らん又地連歌おかハふろ〳〵ぬも侍るやらん
答曰いうるる物の上ふも時ふふふふて一座の去

まぬ時ハ思ふやうならぬるも侍らく大方連
哥ハ只苦しからぬ句に心あるやうなるを地連
哥にして一座の内に耳に立やうに秀逸を
二三句ほと志侍らんこそ上手のしるしにても
侍るへきいかてか句毎によろしきすハ侍るへき
百首の哥にも地哥をよみて秀逸をハ不
及によまれへきこそ古の人も申侍りし然上手
といはれん程の人ハ地連哥にも放埒の言語
き句をハせぬるへくいかにもよき句をもとむれと
もまさしくこころきをまぜ侍る程ハいまた上
手のさかひに入ぬにて侍るへきよからぬ句に
てありとも點者ハ見知り侍るへきにや凡方れ石

によろしき事多くあしき事のすくなきを物の上
手とや申之古の堯舜なと申侍りし聖代にもあしき
事なれなきにハ非す又桀紂とて浅ましき悪王の
代にも能ことの無にハあらすそらく大方に治まて賢
王とも悪王とも申侍りしや人にもよき事多から
んにハかくあしき事も出るさるへきにや連哥の
道にも侍るましきなり　同云発句ハめつ徴に
すへき物にや答日當座の至極の大事なく発句
みて侍る（発句）之事なれハ一座のこゝろかけるされハ堪
能者ハ出来りて末座に斜酌あるへきよ
き発句ハこゝろ同数のかよひをあくらしき又侍
りかさし返くれの至極なり侍るへくいるかせは
志絡ふへかりれ先発句れよろしきと申ハ深き心

のこり何やさ〳〵けさかくあさらしく尚座
の義ふうるひゝるを上品とハやゝ一もかけゝふん
ハうるハ〳〵き秀逸ふてハある座うらに昔の発句ハ
こゝる大やゝよ侍り為相卿

霞むとも雲をハ出よ其の月
といひ二条の後光明院関白殿の

九重よつもきハ源〳〵座の雪
るとせさせ詰へゝるをこそ昔の秀逸とハや
ゝれ今ハかゝるけるも大ゝよ皆へ侍るふや
但為相卿の又

雪消て日影ふぬるゝ高葉哉
とせゝき同関白殿の内裏の七夕ゟ

雲の上ふゝふせゝ〳〵ゝ銀川
るとせさせ詰ひゝるハ今日あさふて西白こそ
皆へ侍らめいうるる詰紙も尚座の百韻ゟ
ハ只あさ〳〵と同ゝるあきやゝよるう一の仏ゟ
てあるふや心を源ゟせん（中のまゝ）とするハいうゟも
き物ふるるゝ此詰ハゝ〳〵匂も発句ゟ
心をゝゝ一かとあるやゝよ云侍れ詰更発句
ハゝ給のある板ゟ一物一をゝん一入てゝるゝ
こゝ姿あゝふさゝゝるゝ一侍りて見一
ゝふ一一千句ゟ発句の姿尚座の発句ゟ姿聊
発別ゝへきふやゝ〳〵ゝけ詰り歟侍り

向云根句ハいふまでもなく（きるもや答曰根句ハ発句を交てきるるもの）ハさのこ心こそるるハもの後一々れと見も何まりふ平懐なんハひろく たゝきるゝと詞屋さ〜〜ん心あゝんる我去 ぬふ（きこゝろつらハ一きやゝるる根句ハ返さを くゝろきるゝたと（ハ万葉るとの長家ふ 付ふ反家とて也家付れんをうけて去うもつく まやうふきるるゝ根句もさふふまや付ゝん 但一発句とあるん一るる板るることハひ物 く付るゝ別のるものかぬやゝふさ（きるやと そ古人中付り此根句ハいゝゝるきる るもハず板ふいゝゝ付る近ハるられた見又

道の大るふて付るゝ末産の人斜砂ある（し 何板ふもたゝ下句ふハかるり付（きふや 同云連家ハ點ハ勝屋ふてあれハうまて點 去るもと定めゝるふそ体を心ゆて去う（付 るるもるゝ（きやらん又點をハ初んよりこ とふ稽古去さ（きう細うふ口付一孫ふ一一 答曰初んの人遥々點を執一ぬふまるきこ 只句うゝを菌云ふういこ一ぬふ一一點ハいう るるゝ上ものもゝ尚産ゝるるゝ（きこさ れハ上ものもゝる句そもたるるれるふや まゝ勝屋板ハめるるも家合のうさいのさに 句ふふ付て点を祈ゝうんとのこ去るゝ（こ

る連歌ハきたるきさちよりて是と初学の初ふ点
をもつまてんを返くいこうこゝぬふまつ　きさ姿
こそ花ふハ侍れ引るとれるをも人よ易祢
侍りしうハ先姿をよくるゝ　ハ自ら的よあ
るるるりとて中侍りし　詠よやあらん　連
歌もかくのことし大方上手ハ句体ハ別の物
ゆてあるもハるハしき秀逸の点のたつ為
るハあるまつ今れたいうふも点志の物点る
とふあひ侍る時ハ人為しも侍る為きさ連歌
ふハ唐の文世俗のことゝ歌合よるゝ侍れハ点
者ハ位の人ハ為ゝ今いこるゝてハ叶まつき
るゝや叶ハ為ゝ朗詠楽府るとの歌合又及

侍るゝ唐の文をとらハ毛詩るとこそ歌のお
こりふてもあるもハ真あるる歌合も侍へ今為
本多獣の名るともるき歌合侍るふやふ
るき歌よ多ゝ元ゝるるふて侍りさるるら
歌毛の始るるふ毛祇旨古るゝてハ他の毛ハ
るまてハあまりハこと丹やとそあ旨ゆる
和漢聯句ふハ詩文ゝふの源き詩の心る
とハ真ある（きるゝ大方和漢聯句をハ伝
付て詞をまもとそふるき人ハ中侍りし　又
点去ふゝて句をたゝふるとゝやゝ中人のあり
為ゝ不移ふハ心（志侍るゝるき姿を於て点去
ハゝゝたもハとて引詠きよハいゝ侍へき

うるハ一き塩能ふるぶぬはとハを〳〵て距数の
を同一ふ付ることそれハ地連家のそ添已
ぬ有るり地連家ふも律ふ入ぬれハ后も定る
〳〵きとかふのる能〳〵ふいこあふハ次第ふてるる
もを〳〵きふや　同云鞠ハ上一八人ふて数も定り
付り連家ハ舎主れ多少ふよりる吉悪も付る〳〵
きう何人斗りうふき程ふて定〳〵き答曰その
るふ付り吉実れふき舎流七八人こそうき
〳〵とちる一たふんハ一座の後又一〳〵真ある〳〵
きるるれ余りふ人数少ふを〳〵ハ勾付ふりて
已弼一又人多〳〵るり〳〵ぬを〳〵ハ物忘を〳〵ふるりて
一座の男ふや〳〵るふさるを但塩鞠ふるり〳〵ぬを〳〵ハ

人多〳〵いうふ多ふれた勾を〳〵ふりてを〳〵て
人数目ふうけぬるふてあれハ舎流の多少ふよ
る海一きふや大方秀逸の出来ぬを〳〵ハその何
こりの一二句ハさめきて西白るり下ふ出来ぬ
れハ又一二句ハ必ハをまるるを〳〵ハかま〳〵て〳〵上
句をえて〳〵て舎合ある〳〵きるふや一座の后
川ふ立ぬれハいうふも同真あるるれるきを物忘
るて能もうき〳〵ふとふるを座きるを〳〵るふ
はの三位入座の鞠ハふと川のあれ流を〳〵ふある
一一とつ句ふ中されふを〳〵ちうふして下りた
やきを〳〵連家も同一るを〳〵上一句のうれ能連家る
とハ中〳〵真あるるふて付るとそ

同云連歌稽古ハ何う肝要の物ゝて侍る〳〵き
和漢の古るすいつまも完合ゝて侍る〳〵と先
いゝれのるを今いこ〳〵侍る〳〵きゝや答日上ゝ
一紙の物を見ても能て用ゝ立侍るゝ下ゝ八百
巻を入てもそれう用ゝるハあるまゝ〳〵きふや
崑山といふ山ゝ入て一顆の玉玦とらぬるもも
〳〵連歌もそう人の堪能ふうてかいこある〳〵き
ゝや山ゝ万葉をやうて侍り深ふ家の根元
ふてあもハ能〳〵御歌を〳〵きゝや天竺日本紀
風土記図の名所のあこりゝと書〳〵る物るハ
源〳〵かいこあらん人ゝ広歌を尋きふこそ又

源氏物語伊勢物語古今仙家代〳〵の撰集名所
の名寄〳〵ふん〳〵ゝ物を考ゝ入ぬふ尋きゝ
こそ〳〵先上ゝを〳〵を河内めて一二万句も尋切
を入て家物ゝるゝ〳〵ぬふうゝ外のるゝ巻あるまゝき
ゝや同云連歌の根源ゝ〳〵ことのさゝぬハうけ殺ぬ
さて天実の風体ハいゝるゝをうゝと定め侍る〳〵
きさゝゝのふをもゝ〳〵こまやうゝ口侍〳〵殺ふ
〳〵答日物の寸覚ゝを中巻〳〵安きるゝまゝとふ
見考ゝをこちゝ〳〵やうてくつめいせさるゝハ
あるまゝきふや玉屑といふ物ゝ詩を学〳〵き
るゝを出〳〵るふも多〳〵祢あるゝ〳〵とて人ゝて
心を侍〳〵と入〳〵ゝ〳〵ハ古も又さゝ〳〵ゝて

ゑ〳〵き先古〳〵ゝの連歌ゝ〳〵のふを
いゝて中侍ゝん山内ゝ見こそ学ゝゝゝれと
あ月〳〵めさん白ゝゝれんを入て屋敷を拾ゝゝ
夫〳〵終〳〵つゐふ白れ体ふゑとつきぬふへ
きるゝゝを不〳〵

上古衆　屋まとたけのみこゝを

ふひたゝ侍〳〵たゝをゑていく歌ゝ祢つる
西井ゝゝつくゝゝ八ゑゝちのくゝの郡ゝつく
ゝ八筑波山ゝ歌照言ふひたゝとハあゝらゝく
屋をゝる我ゝゝ　東燭人つゝ家ていゝく
かゝゑて歌ふハ九夜日ゝゝ十日城

かゝゑひてハうゝふれハとゝゝゝ

家　持郷

さ月川のゐせき入てゝ〳〵田を　あまつけていゝく
かゝるゝさい祢ハゑとゝるゝ〳〵

天暦帝門

中古歌

小夜更ていゝ侍ハ祢ふたゝく成ゝゝ
遠野内侍つけていゝく
爰ふあふ屋きゝ人やまゝらん

邪　経法師

ゝゝそのゝ桃の花　てそ侍ゝゝるゝ

梅津のむ免ハ地ありやとぬらん　公輔朝臣

田の中ゝ翁のふせるとて　信正直覚

田の中ふとき入ぬへき翁うな
宇治入道関白

このこるゝ口ゝ あををいまもや
賀茂川をつくるとて　祝綱清原

かも川をせゝるとき ふてそつくり名歌
かりむ毎をハあ　とれ　伝　綱

近来歌

あとめるハかり川ら紀山ゝ基ゝ付て

うとめといまゝこゝ　侍二位家隆
さゝ作の大宮人の　ゆき
　　かり衣
　　前中納言定家

ひと枝ハあ寄ぬ花のちゝ　ぬ
谷のを川や　あまさるらむ
　　前大納言為家

山ゝ　き　雲のこゝ　きハ下きえて
こちそむる霞の袖ハ　をゝ
　　竹将内侍

うゑハかとりのむるのあけぼの
うゑふこゝ　ゝ　つるとゝ

色まてもうたて化る山さくら　前大納言家氏

ちるこのこゝ紅やてるれさるらん　雜　内侍

行末のうきこの衣ゑふるれて

こ萩ちるふるゝ雨けき夕暮ふ　従二位家隆

庵のうハ毛乃はゝ―やうぬらん

宝治元年八月十五夜仙洞連歌ふ

山里ハ風のゝうふ人ゝこて　少将内侍

そよともをれハ萩のうハ風

さらぬゝよ庵さめちる秋の夜よ　前大納言為家

寛元四年二月法勝寺花のもとよ

わゝ菜つゝふといそくこ海うる　宰相法師

梅の花よ風ふあゝくりハる屋ゝて

宝治元年二月毘沙門堂花の本ふて

櫻色よ空さゝこ色る木末うる　法生法師

花よ色ゝ春るゝくひとの春―

弘年三月毘沙門堂花の本よて　乃生法師

うちなびく柳の枝の永き日は
こゝ迄なきぬもとゝすやとるらん　　関白前関白

山ゝ川の梅の垣根は花さきて
元亨元年正月亀山殿百首連歌
ある〳〵雲井のとそこひ〳〵き　　後宇多院御制衣
花ゝ有ゝはなめる月ハ屋ゝくりて　　法橋千句連歌
あはれ君ハ妻の恋るしるきゝそめて　　右阿法師
うたゝき京ふり八重の恋くこそ

ゝ迄てあるふもとゝ妻ハあ〳〵さこみ　　前中納言家相
ちらぬより風よるくれそ山さくら
天和元年六月百首御連歌
くれ行ゝはの音そかるゝ〳〵さ　　伏見院御製衣
花まゝる檜原よあらゝふきるて
元とまるふくてうたやゝむふん　　中納言為相
柿の色とを流ゝくゝ紅ゝ川
かるるやゝこのこて流るるふん　　民部卿為藤

あさの川きのふの淵はるくるつ
夕くれのうハの空はそまされる　前大納言為世

山ほとゝきを一声も聞ぬ
あやふ恒はいまゝくらう人さと　若阿法師

風うふ夏野の志葛見もまて

遠玄雅　風情　眺付　中務

古今　心付　詞付　躍揚

新古今　ふたけ　季語の句体

誹諧　鬼拉　拉　初学体

向玄連歌の式目八何迄の頃よりあこるるそや
答曰中古まて八一三句付連歌有心
玄心の句るとふてはり恒は諧は式目を仏り
くるるもるゝ　然るに文永弘安の頃より中式
新式るといふもの出来侍り謙倉は為相卿ケ
答の式目とて木林と号して出されしより尚時
用くる新式八大納言為世卿仏られ侍るはやさう
あれと地下のともからも多く尚座のて答はより
て古き式をそむくるは侍り翁うるもる所の式目
を出侍るくるもこと　こるあやまりるくれ見を
用られ侍るへきはやとて懐中より一通をとり出
し侍りしうハありけまゝにうつしとく免侍るなり

連歌式目

問云紙物連歌ハいかゝ

仰屋〳〵答曰昔ハ二字反書こ字中畧物の名なと後鳥羽院の御時ハ殊更賦物を此好ありき近比も原氏玉名なと常ゝ用屋きゝやうるハ一ゝ紙物の古き物とも昔より多く侍れハ今更中ゝ及ま大方初心の人ハ紙物ハ連歌そんせるるふて侍りと存ぬ也一ゝ紙物ハ連歌ぬ也ハいかるる紙物も安きるふて侍りとゝや限りあらんふ一物ハ玉光悟ハ〔きるく〕此ハ西手だゝも深一〳〵とり侍ふさるふや会のるせ他先秀逸の侍を玉極光悟一て紙のさゝ多くある屋きふや

問云連歌ふ百韻なとやるハいかゝ

答曰ハ百韻とも中せ定まる韻の文字ハ韻字なを玉ハこそ百韻とも中せ定まる韻の文字なるなを〔ハゝ〕百句なるとゝこそ中さ先と云人のあるハ誤ゆ侍るふや　答曰そるる侍り京極中納云入反廣光連歌を百韻なるとや中さるる〔へうらに〕聯句をこそ韻の文字あれハさゝふも中せ連歌ハ只百句なるとゝあるへ一と侍られ一さゝハ狼句をも入韻とこそ中侍ふめそ〔そ〕ハ又〳〵狼の句とこそ中せさりるから近比中付〳〵るるるて侍れハ今更如説をゝ一しても沿るき事ふて侍屋き大方い〔ゝ〕るきてるとそゝ侍り玉一

問云連歌批点以下文字他法なも古実侍〔つきや〕

答曰さ一たる他法も侍ら物ねた命ゝ凡在定りて先

扨筆の人さてこゝ寄て寄産はとりよ云さまつひ
てをゝ人の出目よりをゝうひて寄産ふつさて硯を
開きて紙をとりてあ――打て前よ立ハ墨をを
る一文字ゝ字ゝ字ゝ丈説ゝ次よ筆をとりてさ硯をこて二
貫半りを墨よ深て用ハ（き筆硯ぬゝして筆産の
をりをを――て立うるハ――物をかゝふハ一貫を
用ゆことるれを連京ハとりかハて用ゆもる細る
――次よ出目をうかゝひて紙といふ文字を書発句
出て懸賦物を寄産の懸紙松よ高量て沿半お
ハ――一舎先発句より扨筆書てゝゝあけて後詠
吟を――嫌物能ゝ覚ハて中（きゝ他者名字おゝよ
りて能ゝ分別をへき方ゝ内裏仙洞執柄家よてハ
公卿官殿上人ハ名乗旨又位ハ者半六位ハ姓名ゝ

ゝ方次ゝ扨舎定まる式ある（かゝを作連京を
る寄ふかん――るとゝるゝ公妻ゝるとふてハ
ゝゝよいゝらさぶん人ハゝ五ハ――きゝるゝとやせと
も毛詩といふ文よハ嘆嘆ゝゝるふゝゝ（さゝを）を詠京
詠るそ見されハよの産見の姫ゝおをゝゝをと
い――ゝも謀よや西白かゝん時よハ産もを（きゝる
唐國の法よて付れハ産の逸の句ゝ吟――かん
せん連京ゝるとふハ何ゝゝゝる――かゝる（き吟詠せ称ハ
寄産のゝまぬゝふて付ゝるふやと見ゝるゝ産ゝる
ゝゝも未練の人ハ科砂ゝ（きゝ
翁の日今日あもハさるふ玉の御りよ寄ゝゝ毋
所付宰ゝてあるふさゝ付る紙ゝ――（中

ゐり侍るる世せの思ひ出るり今まてためし
るきよろひふてるらひ侍りそもくこ京姐
のこめよ侍りそり一樹の面舎りたよ世せる
らぬるをこそ中せ姥さハそよ苔の袂ゐも
あまりぬる人地そ侍りたさきのあもろ
く侍るふハさそるらぬことを中續け侍るも
いとくつまほ侍るこれ被
霧あるまきくこ世ぢの人ハ美ろしきやふ
のこ連京のをもるり切く昔より肩をるふる
名通こちハいつまの代よもあほりきんのうち
ハさそあふそひきめん人丸赤人るとのるハ
たり侍らを貫之こつまより京ふも代くふ名

をゆるもあ母かりき中古の比ハ定家家隆ハ
も内人あふそろれるふや後鳥羽院ハるを家
隆の京をこめてくあほめるされ
とも定家ハその家まてありしうハ左右るき車
るりき能京をゆこたる時うるふを家隆ハよハ
人せるかとそ定家ハ中さまかよくゆさ
まかろこれともたひよ上ゆけさうひををりて
こそ侍さそるも侍りことるれゆとより京ハ
たけき人のんをたゆを侍屋ろふけ侍るんこめく
風人墨客のありる夏月ゆめて風よあさりて
秀逸をもこめ侍るをるゆあそきるをもあそき屋
ふいひる侍ろきるをもゆきるきる夏ふ丸

ゐ——ゆることの心はさるゝ業の及もうまゝて
あゝかゝきるりともふかんかん——ぬゝ——
又連歌もかゝ（て）心つゝを遠去ふやさ——く
もちぬ（て）伯耆国津湯の冥ゝ見ゝ叶ひ法ぬふ
及の皆領とも放ゆる——とそ代々のかゝこき
人ハ物語り——ゆりしゝ今ハいとゐやさんとて出ゆ
りしふふ名殘多き九地——てつくもれ人とや
ゆりしかハゝゝ業山ゝけ山までも思ひ入ゝゝ
そ覚ゆりし

朱書
應安弐五天初春仲旬ゝ候以或人秘本書ゝ
写　　松門法士及雑

宗伊　心敬　宗祇　宗砌　宗長　行助　宗順

兼載　宗牧　昌休　宗養　紹巴　心前　玄仍
昌叱　昌琢　剛負　滝云ゝ
一巻冊能書写院ゝふ審依右筆後西ふ能
付之
于時明應ゝ年二月廿ゝ日　兼載判

這一冊八禁裏内侍中語又園白陽明内侍并二
從小野一冊元亨以三冊令校合之間不具之同
互多以失今集諸家若説述之姓名有之安
者頗為改易加愚案了了間為訊波問答努
々ふ可多他見者也

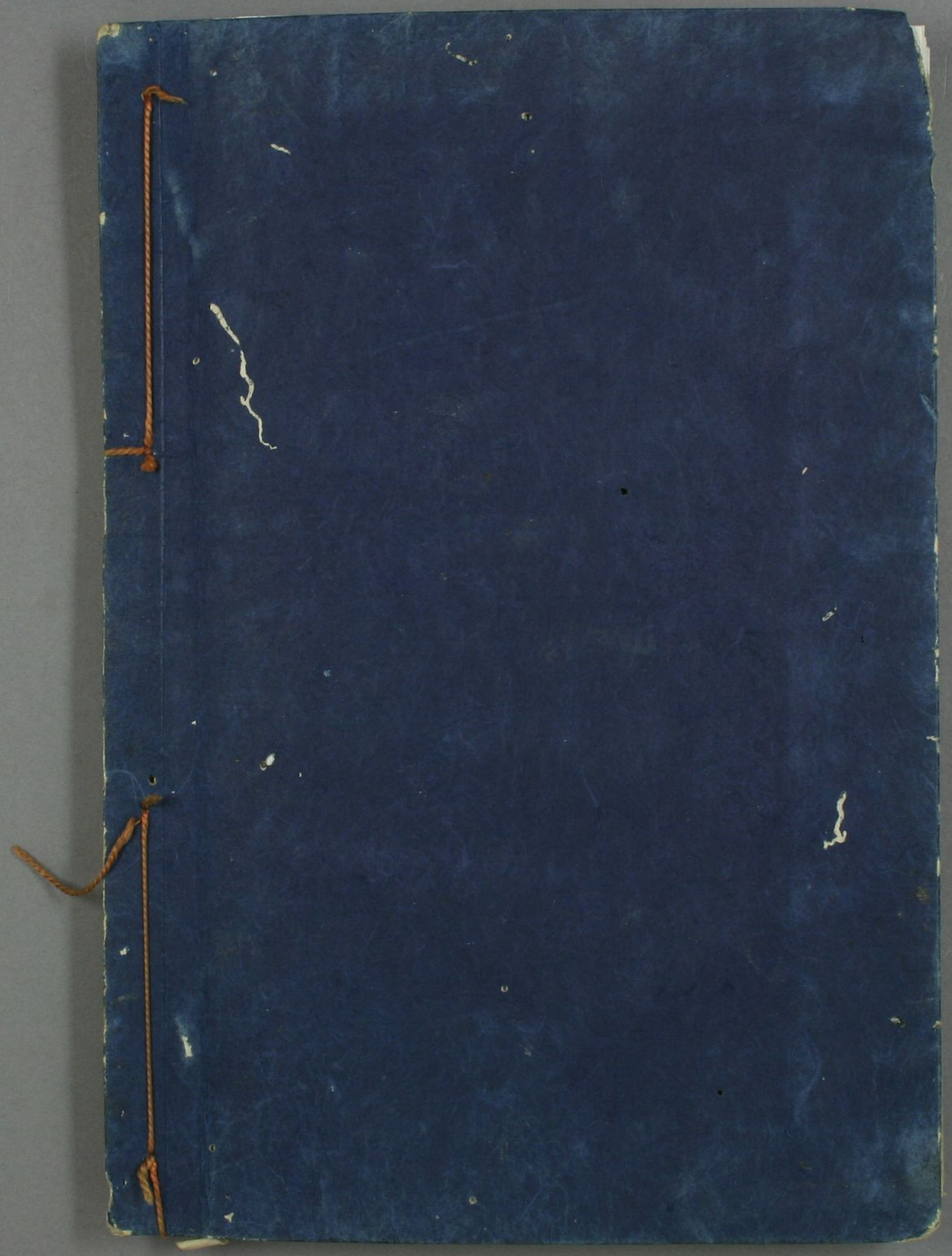
寛永元年十月廿二日　入道二京親王良恕書之

里村右傍書者以朱墨今以墨書之

寛政十二年申正月十九日　渡辺綱峯敬写之

爰連歌者六義中風等五義可具足徒用非一
好色云双者也　然間ふ行詠吉野泊瀬花
嘯雖洩明石月名居名所旧跡通心灵社
灵佛運志顕戀慕慈波之思并有為之為理厭
老少不定之夢欲生者必滅之嘆余哀哉於斯
深旨得稱人暦卜廣詠号赤人和合作秀
歌究竟示天神陪也　云云

干時文化巳年卯四月中旬

平安　里村玄碩所也本

菟玖波山人　石井脩融写之